

首落地蔵と悪ガキたち

梅田 滋

「ちつくしよう・・・」

口に出すと、自分が惨めに思えてくる。

胸の中に押し込めた怒りが、血の滲んだ傷口から堰を切って吹き出しそうになる。それを無理に抑えると、今度は、自分の情けなさが、発作のように瞼の中に充満し沸騰する。

緑に染まった道沿いの景色が、傷口に痛い。視界を拒むように下だけ向いて足を運んでも、身体は自然に農場への道を辿っていく。それはそれで、訳もわからず気持ちを暗くする。

「今学校から帰ってきたのかい。いつもより遅いこと。あーっ、どうしたの！顔中腫れて血がこびりついてるでねえの。喧嘩でもしたんか。あ、ちよっと待ってろ。今拭いてやっから、そのまま待ってろよ」

農場事務所の前を過ぎたあたりで、ちようど畑に出ていた菊地のばあちゃんが、家の中に駆け込んで行った。

いつも優しいばあちゃんの顔をまともに見たら、耐えきれずに泣き出すかもしれないと感じて、すぐ走って逃げ出そうとしたが、甘えたい気持ちが絡んで来て、踏み出しかけた足を

その場から離さない。

家の中から飛び出てきたばあちゃんは、濡らした手ぬぐいと小さなツボを抱えて、オラの目の前にかがんだ。

「あーあ、あっちもこっちも、顔中傷だらけでねえか。ちよっと痛いかもしれんけど、すぐ楽になるからちよっと我慢しろよ」

ばあちゃんは、水で濡らした手ぬぐいで、傷口の血痕を丁寧にぬぐった。その度にビリッと刺すように傷んだが、皮膚に優しく触られている感じが妙に気持ち良かった。

「よし、これで、元どおりのいい男前になった。ちよっと、薬つけてやっからな」

「あっ、それ塩でねえか。オライやだよ、いたいもの」

「ばかたれ、何言ってる！ おめえ、いつも吉井さんとこの葡萄が熟する前に盗み食いするとき、おらんとこさきて、転んで傷になったので塩ください、って嘘言って塩持って行ってたでねえか。おめえが嘘ついでることぐらい、知ってるんだ。

そのバチが当たったと思って、このぐらい我慢しろ」
「・・・なんだ、知ってたんか・・・」

訳を聞かれなかったのでホッとして、ばあちゃんからもらったトマトをかじりながら急ぎ足で家に向かった。

さつきから、農場の空気がいつもと少し違う気がしていたが、幸い他には誰とも会わなかった。

「ミツオ、遅いぞ！ 学校で何してたんだ！ ベゴが腹空かしてつから、早ぐ水と飼葉やつてくれや」

背中越しに父ちゃんの小言を聞き流しながら、顔を見られないうち逃げるように牛舎に入り、入り口の柱に打ってある釘にカバンを掛けて、手慣れた作業をこなした。こんなときは、こつちのことなんか一向に気にかけない牛と一緒にいるのが、気が楽だ。だけど、いつも牛たちの先頭を歩く体のでかいボスが、飼葉桶から頭をもたげて不思議そうな顔して、オラを見ているような気がする。

「ミツオ！ どうしたんだ、その顔は！ 傷だらけでねえか！ 誰か手当てしてくれたみたいだけど、何があったんだ？ 隠さないで話してみれ！」

目ざとい母ちゃんに見つかるのは仕方ないけど、その訳を話すのは嫌だった。

「何でもねえよ。ちよつと喧嘩しただけだから」

「何言ってる。その様子じゃ、喧嘩だって何だって、普通じゃないべさ。心配かけたくないと思うんなら、話してみれ」

母ちゃんには、最後には言い負かされる。しゃくだけど、いつもそうだ。

父ちゃんが共生農団の寄り合いがあるからと飯も食わずに出かけたのを幸いに、おれは夕飯の後でさつきと寝てしまった。いつもとは違う奇妙な夢を見た……。

「ミツオがどうしたって？」

「顔中傷だらけにして帰って来たから、どうしたのか聞いたんだよ。最初は話したがらなかったけど、ようやく話してくれるのを聞いたら、おら、もう腹たって腹たって、涙が止まらなかった。」

「だから、何があったんだよ」

「学校で、先生にこっぴどく殴られたっていうんだよ……話すそばから、涙声になっていく。」

「昨日は学校田の畦の草刈りの日で、みんなで作業するんだけど、飯森先生から、ミツオお前は教室に残れ、と言われた。あくだめだ、おら、もう……」

「泣いてちゃわからんべや。それで、どうしたんだ」

「……教室に残ったミツオを、飯森先生や他の先生も三人掛

かりで取り囲んで、言ったんだって。この間、ガキどもみんなでお寺の地蔵さんに石を投げて遊んで、お前は地蔵さんの頭に石をぶつけて落としたり！お前の仕業だつてことはちゃんとわかってんだ！お前は、どこまで根性が腐っているんだ！つてそう言つて、何度も殴つて、しまいに椅子を振り上げて殴られたつて言うんだよ。どうして、そんなひどいことができるんだよ、先生なのに！」

「地蔵さんの話は本当なのか？」

「みんなでいじつて遊んだのは本当なんだつてさ。でも、ミツオが石を投げようとしたら、投げる前に地蔵さんの頭がポトンと落ちたんだつて」

「それでも、ミツオだけが殴られたのか」

「飯森先生は、いつもミツオを目の敵にしてるんだよ。百姓の子は臭くて、授業中いつも寝てばかりで勉強もできない、つて言われてるらしいんだよ」

「・・・」

「おらが内地で小さい子供だった頃、じいちゃんに聞いたことがある。地蔵さんは子供の無邪気な遊びの仲間になって、みんなにいじられながらお釈迦様の教えを子供に感じてもらうんだつて。内地の東北かどこかの話に、そうして遊んでいた子供たちを諫めた大人が、その後で地蔵さんの崇りにあつ

て病気になった、つて言い伝えがあるくらいだつて、じいちゃん言つてたよ」

「そんなこともあるかもしれんけど、狩太のお地蔵さんもそうだとは限らんべや」

「ミツオが言うには、途中から住職さんも石投げを見てたけど、怒らないで、お地蔵さんの頭は戻しとけよ、と言つてたつて。あんた、学校に文句言つて来てくれよ」

「そうか・・・。明日、ミツオから直接話を聞いてみる。それからだ」

寝耳にうつすら聞こえた話し声のせいなのか朦朧としてるけど、夢の入口で地蔵さんがオラを見て、思わせぶりに口元を歪めながら、眼で含み笑いをした。帰り道で感じた、農場のいつもと違う雰囲気つて、これだったのかな。夢の中でその感じを思い出そうとしているうちに、オラは自分が地蔵さんの体の中に吸い込まれたような気がして、いつの間にか向こうの世界に溶け込んでいつて、怒りも悔しさも悲しさも何も感じなくなつてしまった・・・

オレも、この飯森先生はどうも好かん。まだ若いのに、人を

小馬鹿にしたように高飛車で、それでいてどこかおどおどした気配を感じることもある。こうして向かい合って話している今も、そうだ。

「亀山さんね、ミツオからどんなふう聞いたかわからんけど、はつきり言つて、あれは問題が多くて学校では困っているんですよ。今回の地蔵さんのことだけじゃないんです。いつぞやは、小学校の教室を使って行われている青年学校で、参加者のベルトがなくなる事件があつてですね、その犯人だつてミツオのはずですよ。」

「ちよつと待てよ。それはオレもミツオから聞いているけど、何の証拠もなく先生がミツオを疑つたんじゃないのかい？」

「だつて、その時の現場に一緒にいたのは、ミツオを含めて数人の児童だけど、ミツオ以外の子は、有島の百姓の子達ではないですからね。盗む動機がないんですよ。」

「有島の百姓の子はそういうことをすると、決めてかかつているようだな、先生は」

「いや、決めてかかつているんじゃないけどね、怪しいと疑いたくなる、と言つてるんです」

「どうして、そう思うんかい」

「私らもこういう仕事ですから、いろいろ聞いていますよ、

有島の噂は。噂か本当かまでは、わからんけど」

「どんなことかね」

「いや、言つていいのかどうかわからんけど・・・そうだな・・・亀山さん、あなたも共生農団の青年団の中心人物としてずいぶん活躍のようだから、わかつているでしょう。わかつているというより、ご本人だからね。いつぞやの、というか、つい二、三年前のことでしたっけね、共生農団の総会に、あなたや鈴木さんから青年団の人たちが、ある役員の解任を求め趣意書かなんかを出したつて話。その理由が何なのかということはともかくとして、そんなふうには、いわば目上の人に楯突く気風が有島の農団にあるつてことを聞いて、私は、ずいぶん恐ろしいことだかつて思つてますよ。いや、私だけなのかどうか、それはわかりませんけどね」

「そのことかい。その役員だった人が共生農団の理念に反して自分の耕作地を又小作に出して利鞘を稼いでいたことを、問題にしたのは確かに自分たちだが、それがなんで恐ろしいことなんだね。共生農団は、有島武郎農場主が、相互扶助の精神で運営していくようにとつて、小作人全てが共同で経営することを条件に無償で解放してくれたからできた農場なんだよ。飯森先生の理解がどの程度かわからんけど、農場のみんなはそれ以来ずっとこの精神を守つて頑張つてきたんだ。

そのどこが恐ろしいと思うのか、オレにはわからんな」

「有島武郎のことは、私もそれなりに知っていますよ。農場を解放したことだって、当時の新聞は一種の善行として好意的に紹介したようだけど、国を強くしようとしていた政府は、有島武郎の農場解放は共産主義的な思想に基づいたことではないかとずいぶん警戒したというじゃないですか。あの頃は、大正デモクラシーも盛んだったから、一層警戒したんだね。だから、共生農団も一種の主義者ではないかってことを、村の人らがウワサしているのを聞いたことがありますよ」

「先生、それは聞き捨てならんな。オレたち青年団は、そんなじゃない。この時局を乗り切って戦争に勝利するよう、農村青年の使命感を強く持って食糧増産に貢献しようと、その阻害となることがあれば正そうとしているんだ」

「そうなのかなあ、そんなふうには思えんけどね。いや、ちよっと、亀山さん、そうムキにならんでくださいよ。それに、その役員解任騒動の次の年だったかな、私は役場の人から聞く機会があったけど、きつと亀山さんもご存知でしょう、ほら、『中央公論』から杉山とか言う先生が来て、有島の農場や曾我の農場なんかを調べていったという話」

「ああ、そのことなら確かに聞いているけど、それがどうしたんだい」

「私はその調査の報告書を読んでいないけど、なんでも、お国はその数年前から自作農創設を進めるようになって、その趣旨に沿って農場を有償解放した曾我農場は模範的な農場だという調査結果だったそうです。それと比べて有島の農場にはいろんな問題があるという報告のようだけど、それは聞いていないんですか？」

「その内容までは知らんな。ただ、国の自作農創設については、道庁の方から共生農団に対して、農団を解散して構成員に農地を分けたらどうかという趣旨の案内がきていたけど、役員会で諮った結果、自分らはすでにお国のいう自作農創設以上の仕組みを作って運営しているからそれは断った、ということは知っているし、団員のほとんども納得しているよ」

「農団内部がそんなに一致団結しているのか、疑問ですけどね。井原村長は杉山先生に、有島農場のやり方はダメで曾我さんのようにすべきだ、と言ったそうですよ。村の中でも、そんな声が多いようですよ。有島の人だけがわかっていないと、私は思うな。だから、亀山さん、私ら学校でも、有島の大人はともかくとして、子供らに対しては、国の将来のためにも性根を教育し直そうと思っただけで接しているんですよ。なんといつても、お国のためだからねえ。わかるでしょ？」

どんなひどいことをしても、お国のため、か……。オレは、無言でそいつを睨めつけたまま席を立って、職員室を出た。

「おじさん！みっちゃんのおじさん！」

「おー、マコトか。おめえ、ずいぶん背が高くなったけど、何年生になったんだ？」

「みっちゃんの一年下、四年生だよ。おじさん、なんで学校にきたの？」

「んー、ミツオのことだな」

「そう……。あのお……」

「どうした？」

「みっちゃんが先生に殴られてたとき、おら、偶然その教室の前を通りかかったんだけど、怖くて何もできなくて逃げたしまった……。地蔵さんに石投げて遊んだときは、おらもそこにいたんだ。みっちゃんが石を投げようとしたときに首がひとりでに落ちたんで、みんなびっくりしたんだ。だけど、そのこと、先生が怖くて誰も言えなかった。おらも黙ってしまつて……。だから、みっちゃんだけがあんなに……」

「わかった。わかったから、マコトはもう泣くな。誰だって、怖いときはある。辛いことを自分から話してくれたんだから、

マコトがミツオのことを心配して自分を責めていることはよくわかる。だから、もう泣くな」

「きのう、地蔵さんの夢を見たんだよ。落ちた首がおらの目を覗き込むようににっこりしてた。そしたら、夢の中で、なんだかうれいような悲しいような気持ちで泣き出しそうになって、そしたら目が覚めたんだ。こんな気持ちになつたのははじめてで誰にも言えなかったんだけど、おじさんを見たら、急に……」

「そうか……。それはきつといい夢だよ、マコト」

小学校の玄関を出て、オレは農場に帰る道筋にあるお寺の境内に足を向けた。その地蔵さんに会いたいと思った。

暮石がびっしりと立ち並ぶ境内の奥の草むらの陰で少し空き地になった一角に、それとおぼしき地蔵さんが立っていた。全身の中で頭だけが磨り減って顔の表情がうっすらと浮かび上がって見えるほかは、何の変哲もない姿で佇んでいた。

ミツオの話とマコトの夢を思い出して地蔵さんの表情を見ているうちに、自分が子供の頃よく感じた空気の匂いを嗅いだような気がした。それがどんな匂いだったか思い出そうとしていたら、後ろに人の気配がした。

「この地蔵は、わしら寺のもんは、首落地蔵、と呼んでましてな・・・」

声が聞こえる方を振り返ったら、かなり年配の住職がニコニコしながらオレの顔を見つめている。住職とは顔見知りだが、檀家ではないのであまり会話を交わしたことがなかった。いつも穏やかな雰囲気を漂わせている人、という印象がある。

「不思議な地蔵さんなんですわ、この方は」

「この地蔵さんに石をぶつけて首を落とした、と言われた子供の、父親です」

「亀山サダオさんでっしゃろ？ 有島地区の若きリーダーのおひとりだって、聞いていますよ」

「そんなじゃないっすよ。だけどオレは、農場主だった有島武郎さんを尊敬しています。今、息子のことで学校の先生に会って来たんだけど、共生農団は狩太村の人たちからは危険視されていて、それがお国の時勢にとっては良くないことだと言われました。そしたら、この地蔵さんのことが気になって、帰り道に寄らしてもらったんです」

「この間の悪ガキどもの、あ、いや失礼（笑）、子供たちの石投げのことで、学校に行かれたんですな。」

この首落地蔵は、仏に仕えるわしら僧侶にも理解できないところがあつて、釈迦牟尼の教えの奥深さをいつも感じるんで

すよ。この間の子供達の石投げの時も、わしは子供達の歓声が聞こえて様子を見に行つたんです。それは、ある期待があつたからなんですよ。」

「期待？」

「この地蔵さんは、時々、何かのきっかけで自然にぼろっと首を落とすんです。予測ができないんですけど、だからと言って、単なる偶然ではなさそうなんです。あたかも、何かのお告げでもあるかのように。だけど、そのお告げが何を示しているのかは、決してわかりやすくない。たぶん、私人間がいつの間にか忘れて来た大事なことを教えさすために、とでもいうような感じなんですよ」

「それは、今度の場合、子供の遊びとどんな関係があるんでしょう？」

「わしも、それを知りたいと思つていんですわ」

「ご住職も、ですか？」

「子供たちの悪戯っぽい歓声が聞こえたので、ひよつとしたら地蔵の首が落ちるところを拝めるかも、と思つたのです。子供というのは、大人がずる賢く隠したまま生きている様な矛盾した心を、何の外連味もなく、無邪気に残酷に素直に表しますわなあ。それが、人間の本来の姿でっしゃろ。釈迦牟尼は、それをそのまま受け止めた上で、よりよく生きる道

を探したお方です。地藏菩薩も、子供だけでなく人間のそんな性（さが）をそのままニコニコと受け止めて、その矛盾した性（さが）と共に生きることで、ご自身もよりよく生きる道を求めて苦しもうとなされた方です。そんな性（さが）が眼に見える形となった状況に出会うたときに、そのことを人間にわかりやすくお示しになるために首が落ちると違うだろうか、と、わしは思うております。」

「オレには、ちよつと難しい話だけど、なんか、分かりそうな気がします。」

「子供が石をぶつけて遊ぶことは、子供の残虐な側面が一見形に現れたと言えますけど、それはむしろ人間の誰にも潜んでいることでつしやる？まあ、戦争のことだとは言いませんがなあ。亀山さんは、どうですか？わしは、僧侶の身ではあるけど、そんな残酷な心も持つておりますじゃ。地藏菩薩は、それを隠さずに遊びや礼拝の心情の中に表すことを認めておいでなのだと思う。その上で、それをどうするか、人間の本性において各自が納得のいく解決を探るよう、無言のうちには教え諭しているのではないのでしょうかのお。」

「それで、首が落ちたということですか？」

「わしは、そう思うとります。この間の石投げの時、あなたさんとこの、ミツオくんでしたかの？あの子が石を投げよう

とした時に地藏さんの首が落ちたのを拝むことができて、わしは、いつかあなたさんと会って話ができることを予感しましたんじゃ。こうして、お会いできたことだけでも、地藏さんの想いは実ったのかもしれない。ここから先は、今度は亀山さん、あなたさんと有島の人たちが引き受ける番でしょうなあ。学校の先生が何を言うたかわからんけど、気にすることはない、とわしは思いますよ」

坊さんというのは謎かけが得意だな、と半ば苦笑しながら住職の話聞いていた。その間、オレは地藏さんの顔を、いや頭をじつと見つめていた。ひよつとしたら、という期待もあったからだけど、オレが見ている間は、首落はなかった。相変わらず、微笑んでいるような、皮肉笑っているような、不思議な笑みを微かに浮かべて立っていた。

ふと、オレは、ミツオに軽い嫉妬を覚えた。何でかな・・・。

「おい、マコトでねえか！」

「みっちゃん！」

「久しぶりだなあ。どうしてここに？確か学校の先生になつてあちこち異動してるって、風の噂に聞いてたぞ」

「ああ、みんなこの近くだけだな。今、岩内の中学校だよ。今日は、調べたいことがあって、久しぶりに有島記念館に来たんだ」

「親父の葬式以来だもんな。それにしても、お前が学校の先生になると聞いたときは、びっくりしたつけ。悪いけど、オラは相変わらず学校の先生は大嫌いだからよ」

「やっぱりなあ。みっちゃんが教師嫌いだというのは、おれもその理由はわかってるつもりだよ。おれね、だからこそ教師になることにしたんだ」

「そうか。相変わらずクソ真面目だな、おまえは」

「おれなりに、教師って仕事に仕返しをしたいんだよ。だから、教師になったんだ。いや、おれ自身への仕返しかもしれない。でも、やっぱりと言うか、おれの職場だってあの飯森先生まがいの奴ばかりだよ。そんな同僚だけでなく、そこにいて何もできないおれ自身もなかなか許せなくてさ。

でも、生徒は、たとえ不良と言われていても、可愛いよ。みっちゃんは、家の跡継いだって聞いてたけど」

「ああ、親父と同じで、兼業農家ってやつさ」

「よく遊びに行ったけど、あの家はまだそのままかい？」

「まさか。じいちゃんが建てた入植時代のものだったから古くて住みにくいし、かと言って、じいちゃんも親父もおふく

ろもまだみんなそこにいるような気がするもんだから、新築する気にもならなくて、大工の真似事しながら自分で直したさ。オラ、あの地蔵さんのことがあってから、古いものが気になって捨てられない性分になったみたいだよ。親父が生きてもた頃、よくそう言ってオラのこと笑ってたよ」

「地蔵さんは、今でもまだあるのかい？」

「あのお寺は建て替えられて、境内もかなり変わってしまったよ。地蔵さんもどこに行ったのか、いまはもうないみたいだな。オラも、あのことがあってからは、ずっと見てないんだ。あの飯森って先生を思い出すのが嫌だったしな」

「飯森先生といえば、みっちゃんが卒業した後のことだから知ってたかどうかかわからないけど、戦争が終わってから手のひらを返したようにころっと変わって、さも自分は昔から民主主義教育をしていたような顔をしてさ、それで、校長の娘をもらってどっかに栄転したんだよ。」

「ああ、そのことなら聞いてたよ。世の中ってそんなもんかかって、ますます教師ってのが嫌いになったな。そういえば、その話を聞いたとき、おやじがボソツと変なことを言ったんだけど、オラはそれがどういふことなのかわからなかった」

「なんて言ったの？」

「その出世は首落地蔵の祟りだな、って」

「そうか。それはおじさんらしいなあ」

「それ、どんな意味なのか、おまえはわかるんか？」

「ああ、たぶんな。あの先生、最近亡くなったんだけど、盛大な葬儀だったらしい。出世もしたし財産もこしらえたから、世間体は立派だったんだ。だけど、葬儀会場で隠し子が名乗り出てきたり遺族同士の財産争いもあって、めっちゃくちゃだったって、参列した人から聞いたよ。事情知っている人は、バチが当たったんだ、って吐き捨てるように言ってた。だから、おじさんの予言は当たったんだよ。今の世の中を見てたら、そんなことばかりじゃないか。」

「つてことは、オラが石を投げる前に地蔵さんの首が落ちたのは、その予兆だったってことか」

「だと思っよ」

「・・・マコト、ちよつとオラんところに寄ってけよ。その話を聞きたがるのが、もう一人いるから」

「ああ、トミエさんだね。じゃあ、寄らしてもらっよ。」

みっちゃんも知ってる先輩のノブイチさんも、あの地蔵さんのことをずっと考えてきたようなんだ。そのことも話したいし」

(おわり)